

ト一カちゃんに命を捧
げる

コヨーテ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は小坂依子に成り代わり少女になった。

友のためなら命だって惜しくないと豪語する彼女の夢は幸せに生きること。

臆病、なれどイカれた少女は霧島董香の友人である。

目次

馬鹿 遅刻

12 1

遅刻

ふとつけっぱなしのテレビを見ると、嘉納総合病院の院長が遺族に無断で臓器移植手術を行ったとの報道が流れていた。

「となるとようやく金木研が喰種になったわけか。僕という異分子がいてもこうなるとは、運命なんて眉唾ものだと思つてたけど案外そうでもないかもしれないね」

カタカタとキーボードを叩きながら呟く。今やっているのはパソコン内のデータの整理だ。ここには他人に知られてはまずい情報が多く入っている。

例えば表社会に潜む喰種の住所や顔写真、務めている仕事場や通っている学校まで多くの個人情報詰め込まれている。他にも一般人が知つてはいけない厄ネタばかりがこのパソコンには集められている。

「さてと、僕はこれからどう行動すべきか……とりあえず銃弾でも買つてこようか」

これから20区の情勢は大きく動き出す。ならば僕も備えが必要だ。銃弾と言っても普通の銃弾じゃない。買つてくるのはQバレット、溶かした赫子を練り込んだ銃弾だ。

威力は低いが当然喰種にも有効。高レート喰種には赫子で弾かれて終わるだが、攪乱くらいには使えるだろう。無論一般に販売はされてないが、それでも裏社会では高値で売られている。横流しか密造か、品質が良ければどっちでもいい。

そんなことを考えていると携帯が鳴り出した。電話をかけてきたのはトーカちゃん、こんな夜中になんのようにだろうと思いつつも、いながらも応答する。

「もしもしトーカちゃん、依子だよー」

『依子今日休み？先生が心配してたけど』

「え、もう学校？」

慌ててパソコンの時刻を見ると八時半を過ぎていた。どうやら窓のない部屋に閉じこもって、ずっとパソコンに向かい合ってたせいで時間がわからなくなっていたらしい。

「ウツソだろー！もう朝かよー」

『まさか寝坊したの？』

恐らく朝のホームルームが終わった今、無断欠席の僕を心配して電話をかけてきてくれたのだろう。トーカが連絡してくれなかったらいつまでも気づかなかったと思うから感謝しかない。

「寝坊じゃなくて徹夜……今それはどうでもいいや。ゴメントーカちゃん、『小坂依子は一時間目は休みます』って先生に言つといて。二時間目から行くから」

『わかった、じゃあ学校で。もう授業始まるから電話切るよ』

「おけ」

切れた電話を見ながらフーと息を吐く。まさかもう朝になってたとは。更に遅刻だ。家から学校までは20分もあれば着く。なら学校の準備に十分かけるとして、まだ二時間目までは余裕があるな。

「なら卵かけご飯でも食べるか」

そう思いパソコンを閉じてキッチンに向かう。冷蔵庫から卵と冷凍ご飯を出して、ご飯をレンジで温める。その後どんぶりに入れたご飯の上に卵を乗せて醤油をかければ完成だ。

「いただきます」

うん、美味しい。そのまま七分ほどで食べ終わると後片付けをして、学校に行く準備を始める。その時また携帯が鳴った、今度は電話ではなくメールのようだ。誰からだろうと思ひ差出人を見てみる。

「お、エトじやん」

差出人の名は高槻泉、小説家だ。それでいてSSSレート喰種『梟』でありアオギリの幹部でもある。メールの内容はいたってシンプル、次の土曜に会えないかというものだった。

特に断る理由もないので了承のメールを送り返す。しかしエトは僕のことをどう思っているのだろう。僕は彼女を友人だと思っているが、エトからどう思われているかはあまり考えたことはなかった。

単なる捕食対象としか見られてなかったらちよつとショックだな。そう考えつつ時計を見る。

「あ、もう時間だ。学校行く」

「徹夜の身にボソボソ喋る教師の授業はキツイよ。眠さがヤバい。なんとか耐え切ったけどさ」

「じゃあなんで徹夜したんだよ」

放課後の教室でトーカちゃんが正論を浴びせてくる、これに関しては僕が悪い。今度からはなるべく早く時計を見ながら作業をしよう。そう心に誓った。

「時間見忘れてた、窓のない部屋にいたらいつのまにか朝だった」

「時間感覚狂ってない？ゲームはほどほどにしときなよ」

「そうするよ。あ、そういえばトーカちゃんってどこか行きたい場所とかある？今度出かけようよ」

別にゲームをしていたわけではないのだが、わざわざそれを言う必要はないだろう。話が変わるが最近遊びに行っていないから今度二人でどこか出かけた。いつも僕が行き場所を決めてるから、今回はトーカちゃんに決めてもらおうと思つての質問だ。

「行きたいところ？」

「そう、いつもは僕のチョイスだからたまにはトーカちゃんが行きたいところに行こ

うよ。行ったことない場所とかさ」

ピンと人差し指を立ててテンション高めに言葉を促す。トーマちゃんは少しばかり考えるそぶりを見せた後口を開いた。

「動物園は前行ったから・・・水族館でも行こっか」

「いいね、イルカショーとかサメとか見て回ろうか」

トーマちゃんの言葉に同意した僕は、バックから手帳を取り出すと予定がないかどうか見ていく。休日に行くとして直近の土曜日はエトに会いに行くから行けない。ならその次の日の日曜だ。

「次の日曜日バイトのシフト入ってる？」

「日曜は元からバイトはナシ、依子がいいならその日で大丈夫」

「なら日曜で決定！集合場所と時間は後々連絡するね」

手帳に予定を書き込んでいるとなんだかワクワクしてきた。一緒に遊びに行けるのは本当に楽しみだ。そう思っていると突然教室のドアがガラリと会いて教師が話しかけてきた。

「小坂、お前この前の件で話があるからちよつと来い」

要件とはなんだろう、もしかすると同級生と喧嘩したことを責められるのだろうか。まあそれしかないだろう。他に何かやった覚えはない。

「じゃあトーカちゃんは先帰ってて。また明日」

「依子なんかやらかしたの？」

「なんでもないよ。些細なことさ」

放課後雑談してただけだからこの後トーカちゃんはすることがない。説教が長引いて待てせるのもアレだから、先に帰るように促す。そのまま教師の方に歩を進めて別れの挨拶。

「バイバイ」

「しかし40分も説教するとはなんなんだ、先に仕掛けてきたのは向こうなのに」

そう呟きながらバックを持つて学校の外に出る。その時夕日が目に入った。綺麗な綺麗な夕日だ。そういえばトーカちゃんに初めて出会った日もこんな夕日だったつけ。

ねえ、トーカちゃんは知らないと思うけどさ、僕にとつて君は光なんだ。太陽のように輝いてはない、月光のように美しいわけでもない、でも僕にとつて君は世界で一番の光。側で行き先を示してくれる誘導灯のような光だ。

まだ出会つてからそこまで経つてないというのに不思議だよ。けど僕は臆病者だ。本当に君のためを思っているのなら、トーカちゃんが喰種だつてことを知つてゐるつて打ち明ければいいのに。そして君の全てを受け入れればいいのに。

『人間関係は化学反応』打ち明けたら望む望まないに関わらず、僕らの間には何か変化が起こる。その結果今の関係性が変わってしまうことを恐れて、僕は一步を踏み出せない。

ここは漫画じゃない、現実だからこそトーカちゃんが僕をどう思っているのかわからないんだ。もしかすると僕という人間はそこまで好かれてないかもしれない。

そこまで仲良くない相手に『私は君の全てを知っています』『けど受け入れますよ』されたところで気持ち悪いだけだ。

トーカちゃんの全てを受け入れようとして逆に拒絶されるのが怖いんだ。重いかか

そういう理由で離れられるのが怖いんだ。本当に情けないけどね。

だから、今はまだこのままで。

その日の夜、満月がアスファルトの道路を照らす。スニーカーで地面を踏みしめながらたどり着いたのは14区にあるバー、名を『Helter Skelter』とある喰種が経営するバーだ。

ドアを開けると中に客はいなく、椅子に一人の女性が座っているだけだ。彼女こそこのバーの経営者、イトリだ。僕を見ると驚いたような顔をした。だがそれも一瞬、その

後は笑みを浮かべていた。

「珍しくない？依子があたしに会いに来んの。てかお酒飲めんの？」

「飲めない、コーラある？」

「ここはバー、お子様の飲み物は置いてないって前も言わんかった？」

「そういや言ってたね。まあいいや、そうかもと思って持ってきてるし。今日はゆっくり情報交換でもしながら飲もうと思ってさ」

持参のコーラをバックから取り出す。その様子をイトリは呆れた顔で見ている。カウスター前の椅子に腰掛けるとコーラの蓋を開ける。

「そろそろマスク慎重しようと思ってるんだよね。どんな柄が良いかなあ」

「やっぱ道化柄？依子も一応ピエロなんだしさ」

「えー、あれ前が見づらいんだよ。喰種にはへっちゃらなのかもだけど人間の僕にはきついなのなんの」

そう言い終わるとコーラを口に含んだ。炭酸の刺激が口内を蹂躪する。この瞬間はたまらない。やはりコーラは正義、コーラ最強。

「うん、美味い」

馬鹿

小坂依子はピエロの新参メンバーだ。加入したのはいつだったか、確か何年か前にウタが連れてきた気がする。見たことないタイプの人間だった、ヒトだというのにあたしらの中で居場所を獲得していく面白い人間。そして気づけばピエロになっていた。

「風の噂で聞いた話だけど……リゼ、一昨日死んだんだってね」

依子は酒を飲みながらあたしに話しかけた。何故依子が酒を飲んでるのかと言うとあたしが勧めたからだ。コーラを飲み干した依子に押し押しで行ったら見事飲んでくれた。未成年なのに大丈夫？ ってからかい混じりに聞くと『合計年齢は20超えてるからおけ』と返されてしまった。なんのことだろう。

しかしリゼのことをどこで聞きつけてきたのやら。実際にリゼに鉄骨を落としたりは同じピエロのメンバーである喰種捜査官なのだが、依子はそれを知らない。

それどころかその喰種捜査官と会ったことすらない。あの子はたまにフラツとくるだけ。ピエロの策謀陰謀享楽活動にはあまり関わってない。

本人は加入直前に『ピエロに加入はしたいけど、活動はあんまりできないと思うよ？ 僕学生だから』と言い残している。その言葉を聞いたあたしは大笑い、そのままどこか

ズレてる少女を歓迎したことを覚えている。

「お、耳が早いねえ。流石は情報通ってどこかな?」

「やっぱイトリも知ってるんだ。ま、本職の情報屋には敵わないか」

飲み終わったコーラ瓶をテーブルに置くと、依子はバックから薄い紙束を取り出しあたしに差し出した。

「これ何?」

「とある香水会社に作ってもらった書類。流し見でいいからとりあえず読んでみよう」

「ふむふむなるほど……」

それはとある香りの香水を作成する過程を記したものだ。題名は『喰種香水』、その名の通り喰種の臭いにする香水だ。書類の大半はそれを作るための材料や実験過程が書かれていた。しかも実際に物が完成しているらしい。

「その社長と個人的な繋がりがあつてね、香水作成を手伝ってもらったんだ。毎回喰種の死骸から服ぶんどるのも面倒じゃん?」

喰種の集まりに行く時、依子は死骸から取った服を着る。流石に人間の匂いのまま行くわけにはいかないからだ。だが確かに毎回そうするのは手間がかかる。なるほど、だからこんな香水を考えたのか。

「それで、今からその香水をつけてくるからどんな感じか見てくれる？ 実際喰種の嗅覚を誤魔化せるのか心配なんだよね」

「おーこのイトリ様に任せなさい」

その後香水をつけた依子の匂いは完全に喰種のもだった。それに驚きつつ、有効活用したら面白いことになりそうだなと内心ほくそ笑む。そんなこんなで今夜はお開きになった。

ただ一つ気になったのは依子が持ち歩いてた白いアタッシュケース、いつもは拳銃しか持ち歩いてなかったと思うけどクインケを持つようになったのだろうか。喰種の匂いでクインケを持つとか面白いね。

「満月が綺麗だなあ」

二十区の道路を歩きながらそう呟いた。喰種香水は大成功、イトリの嗅覚すらも誤魔

化せるなら並の喰種なんてお茶の子さいさいだろう。特に何に利用しようとかは考えてないが、これを使うことでやれることの幅が広がるのは確かだ。

今日せっかくの香水が実戦で使えると判明して気分がいい。更に酒の酔いも合わさって最高の気分だ。てかなんで喰種のバーに普通のお酒が置いてあるんだよ。そうツツコミたくなるのを抑えた、夜道で一人でツツコんでたらそれはただの危ない人だ。

そして酔いと高揚が僕に間違つた判断をさせた。いや、軽率な判断というべきか。

「よし、この勢いで金木研に会つてみるか」

どうせ退院したら接触するつもりだったんだ。今会つてもいいだろう、今は九時だしどうせ起きてる。小説でも読んでる気がしてきた。そんなことを考えながら歩いていたら、前方にとある二人組を発見した。一人はどこかで見たことある男だ。

「嘉納院長か！」

朝の謝罪会見で見た顔だ。遺族に無断で行つた臓器移植手術、実際はリゼの赫包を金木研に移植しただけなのだが。僕の言葉に反応した男は僕問いかけた。

「ああ、私に何のようかな？」

「いやいや別に用とかないんだけど……」

一瞬間によぎる思考、この男を今殺したらどうなるか。少なくとも東京喰種と言う漫

画において展開されたストーリーは粉々になり、この世界は全く別の道筋を辿ることになるのは確定だ。そんな思考が脳内を駆け巡る中、嘉納の隣の男が僕の方に近づいてきた。

「あれ？ 貴方が持つてるのクインケじゃないですか。その割には背もちっちゃくてとても喰種捜査官には見えないんですけどねえ」

目の前の男の正体には心当たりがあった。嘉納と一緒にいてCCGの知識がある黒髪の男、それでいてこの喋り方。そして今はリゼ確保から二日。

「おいおいおい、いきなり旧田かよ。この時間は愛しのリゼと一緒に時いると思つてたけど」

その言葉を二人が耳にした瞬間、世界が静止するような感覚がした。そして目の前の男が僕を捕まえようとしてきた。流石に今の言葉は失敗だった、酒のせいだ。

全部酒のせい。普段の僕がいきなり路上で喧嘩を売るわけがない、生まれて初めての酒だったからこうなってしまったんだ。恐らく旧田は怒っている、表情を見ればわかる。顔は笑つてるけどあれは怒りの笑いだ。

「なんで僕の名前知ってるんですかねえ。ただの厨房が」

「旧田君、一応捕まえてくれるかな。どこから情報が漏れたのか興味がある」

「あれ、これもしかしてヤバイパターン？」

慌てて僕は逃げる、だが旧田相手に生身で逃げるなんてことは不可能だ。だからこうする。白いアタツシケースのスイッチを押して準備はオツケー。

「さあ纏え」

アラタ proto

「全力で逃げる！」

僕は馬鹿だ、なんでこんなことしたんだろう。多分全国の酒飲みもみんな同じこと考えてる。今までは酔っ払いの心理を理解できなかったけど今は理解できる。酒飲んでる時って正常な判断ができない。

「纏うクインケ………」

流石の旧田も驚愕しているか。そう、この前1区で捜査官の死骸を漁ってたら見つけたものだ。僕は時々クインケ調達のために捜査官の死骸を探す、クインケは愛蔵用としても価値があるし高値がつくからね。

「ごめんね旧田！アラタキック！」

「ガハッ！」

そのまま旧田に蹴りを一発食らわせる。この時点ではまだ喰種化手術を受けていないように、やけにすんなり蹴りが入った。しかしそこは旧田、そのまま起き上がって僕を追ってくる。

しかしそんなのは意に介さず僕は逃げる、路地裏に逃げ込む。するとそこには目が赤い青年がいた。

「おいお前喰」

「囧になつてくれ！」

喰種の言葉を聞き終える前に旧田を喰種に押し付ける。全くもって外道のやり方だ、だが効果はあつたらしい。後ろで旧田と喰種が戦鬪になつた音が聞こえた。

その音を聞かずに僕は逃げる、そのまま市街地の屋上を駆けて行つて少しした頃、旧田の気配がしなくなった。逃げ終えたかと思つたその時、全身に苦痛が走つた。

「アラタが僕を食べてる．．．？？？そういえばあつたな、原作でそんな描写」

痛い、全身を虫に喰われるような痛みだ。まずい解除しなければ、そう思い背中へのイツチを押す。するとみるみるうちに全身に纏つていたアラタがアタツシユケースに収納されていく。

「クソツ、鍛えてなかつたせいか」

体がもう動かない、特等なら喰われながらも戦うことすらできそうだが、あいにく僕は一般女子高生。そんなことはできないのだ。どうしよう、意識を失うことはないけどこのままずっとここにいるわけにもいかない。

本当に嘉納に話しかけなければよかつた、もう酒は二度と飲まない。そう考えてると

後ろから誰かが駆け寄ってきた。

「依子！依子！大丈夫！ツ！！？この匂い………喰種！！？」

声の主は親友。ああ、最悪だ。